

多様性に富む臨床検査部門で “個が輝く” 臨床検査技師の資質とは

座長 新井浩司[†] 眞能正幸*第72回国立病院総合医学会
(2018年11月10日 於 神戸)

IRYO Vol. 73 No. 12 (520-522) 2019

要旨

臨床検査部門は数多くの診療部門を含めた他部門と連携し、多様性に富む業務を実践している。しかし法的特性上、診療部門からの指示、依頼を受けての業務実践とならざるを得ないこともあり、受動的体質となりがちである。そのようなことから臨床検査部門は、依頼された内容に対し正確かつ迅速に結果報告することが臨床検査業務のすべてと誤解を受けがちな部分が多い。また、近年の医療業界全体における技術革新・進歩は目覚ましく、臨床検査技師の受け持つ業務は今後、自動化機器やAIに置き換わり近未来的に消滅する職種とまでいわれており、臨床検査技師の将来性について危惧されている。

本シンポジウムにおいては、現時点における臨床検査業務を継続させるための現状維持的視点ではなく、今後医療の動向を踏まえ、臨床検査部門が柔軟に対応、進化していくためにはどのような取り組みを開始しなければならないか、またその基軸となり必要とされる人材は何か、その人材育成について、「技師の資質」「国際規格認定制度 (ISO 15189)」「化学分析」「組織のあり方」の各観点から、造詣の深いシンポジストの方々に現状と課題、対処方針、必要とされる人材、人材育成方法について未来志向型の発表を行っていただいた。

総合討論では各演者ならびに参加者により人材確保と育成についての議論を行い、今後、さらに進化を遂げる医療の中で、臨床検査部門には柔軟な多様性のある対応力がさらに求められていることが浮き彫りとなった。またその組織中核は「人材」であり、優秀な人材を今後どのように確保するのか、さらにはどのように育成を行うのか、議論を行い、その組織運営のマネジメント責任を担う臨床検査技師長の資質についても言及し、本シンポジウムのまとめとした。

キーワード 臨床検査技師, 人材育成, ISO 15189, 技師の資質, 組織のあり方

はじめに

臨床検査部門は、幅広い種々の検査を実施しており、元来多様性に富む部門であり、すでに多くの疾患に対応した「個別化医療」を支えているといえる。

しかし、医療業界全体の技術革新・進歩が目覚ましく、臨床検査部門業務は、自動化機器やAIに置き換わり、臨床検査技師の存在意義そのものが問われかねない可能性がある。

本シンポジウムでは、この多様性に富んだ臨床検

国立病院機構京都医療センター 臨床検査科, 国立病院機構大阪医療センター 臨床検査科 * 臨床検査診断部長
† 臨床検査技師長

著者連絡先: 新井浩司 国立病院機構京都医療センター 臨床検査科 〒612-8555 京都府京都市伏見区深草向畑町 1-1
e-mail: kojirai@fd5.so-net.ne.jp

(2019年3月20日受付, 2019年9月13日受理)

The “shining” Qualities of the Clinical Laboratory Technologists in Clinical Inspection Departments

Koji Arai, Department of Clinical Laboratory, NHO Kyoto Medical Center

(Received Mar. 20, 2019, Accepted Sep. 13, 2019)

Key Words: clinical laboratory technologist, human resource development, ISO 15189, qualities of the clinical laboratory technologist, the status of the organization

査部門が、今後どのように変化していくのか、また、それに対し、個々の臨床検査技師はどう対処すべきか、さらに、どう次世代を担う技師を育成すべきかについて、それぞれの立場から各演者に論じていただいた。その後、参加者とディスカッションすることで、今後の臨床検査部門および臨床検査科の方向性を考えるシンポジウムとなった。

シンポジウムの展開

まず、NHO大阪医療センター臨床検査科臨床検査診断部長眞能正幸氏が、「臨床検査部門の多様性とそれに対応できる臨床検査技師に必要な資質とは」の演題名で、多様性に対応できる臨床検査技師の資質とは、自ら考えることと双方向的コミュニケーションが取れることであり、その資質育成には、国際規格であるISO 15189の手法を利用することが有用であると報告された。考える力の養成法として、PDCAサイクル手法の利用法を家族で遊園地に行く事例で説明された。また、Checkには、日々の記録を充実しておかなければ有効にできないことや、多角的な視点で検討することの重要性と、Actionには実行期日を明確にしておくよう言及された。報連相の事例をあげ、資料利用時における原典確認の必要性や言葉の定義確認の重要性に言及しながら、知識と技術の内容を理解の上、実際に自らが実践していく過程で、これらを自らの技能と知恵として習得し、さらなる研鑽を積んで見識ある技師を目指してほしいと締めくくられた。

次に、国立研究開発法人国立国際医療研究センター病院中央検査部臨床検査技師長永井正樹氏から「臨床検査部門における国際規格認定制度の展望とそれに対応できる臨床検査技師とは」の演題名で、本邦におけるISO 15189の認定取得数が166施設に増加していることや、2018年12月には医療法と臨床検査技師法の一部改正にともなう省令の施行により、臨床検査の品質管理が注目されていると報告された。また、今後もゲノム医療の進化などにもない、品質管理の厳格化は必至であり、品質管理に対する知識とスキルの向上が重要とのことであった。品質管理に対応できる技師の育成は、従来型の技師教育ではなく、品質管理に特化した専門的教育の重要であることや個人の資質について報告された。さらに、国立医療機関の臨床検査室でもISOの取得が進んでいるが、転勤制度をとった組織において、

認定を維持継続していくためには、組織としての明確な戦略が必要であり、パラダイムシフトが求められていることにも言及された。

次に、北海道がんセンター臨床検査科臨床検査技師長志保裕行氏から「臨床検査の限界と今後導入されていく臨床検査に対応できる臨床検査技師とは」のタイトルで、まず、共存分析の中でも酵素的分析法が特異性の高さや測定時間が短いなどの利点により、著しい勢いで普及し利用されていると説明された。次に、今後成長する技術として、臨床化学で使用されてきた質量分析法が微生物の同定に応用されていることや、遺伝子検査がコンパニオン診断としてがん診療に導入されてきていることを報告された。人材育成について、どんなにハイテク機でシステム化が進んでも乗客が安心して航空機を利用するには経験と操縦の知識を有するパイロットによる操縦が不可欠のように、検査機器の自動化が進んでも、臨床検査技師にも測定結果の精度保証に関する技術と知識が必要であり、そのためには、基礎的な学力の強化のみならず、組織力を生かした育成戦略や、管理職の意識改革が必要であると締めくくられた。

最後に、NHO本部医療部医療課臨床検査専門職渡邊清司氏が、「変化していく病院での臨床検査部門のあり方に対応できる臨床検査技師とは」の演題名で、病院機能の枠内において、臨床検査技師の能力を如何に発揮させるかという観点から考察を加えられた。病院組織は機能の面から「タテ型」、「自律分散型」、「ネットワーク型」の3タイプに分類できるとした上で、臨床検査技師の専門性が十分発揮できる事例を「強み」とし、逆にこれから期待される事例を、現時点における「弱み」として捉え、臨床検査技師が自らの意思でコントロール可能であり、将来に向けて努力を重ねることで実現できる事例を、組織タイプごとに提示された。具体的には、まず「自律分散型」で専門家としての柔軟性について言及され、次に「タテ型」で現実的な転勤制度の運用法を提案した。さらに「ネットワーク型」では、内外に向けたコミュニケーションと広義に解釈し、ビッグデータを活かした情報発信の事案を取り上げられた。

総合討論

総合討論では、①優秀な人材の確保 ②人材育成方法 の2つの課題について議論が集中した。

まず優秀な人材の確保については、現在の転勤制度による専門性の高い人材流出に対する対応が論じられた。組織として専門性の高い技師の確保は、その組織における臨床検査の質そのものに関わる重要課題であり、転勤制度に関して否定的な見解を示さざるを得ないとの意見もあったが、転勤制度は国立医療ネットワークを有効に活用するための重要な手段として不可欠であることも事実であり、ネットワークを有効活用した新たな転勤制度導入の必要性が示唆された。

また人材育成については現在各施設に委ねられているのが現状であるが、問題を生み出しているのは施設格差であること、さらにはその施設格差は組織責任者の意識格差によるところが大きな要因となっていることが大きな課題である。また人材力量を客観的に判断できる手段導入も大きな課題であり、その客観的評価を实践できる手段として、ISO 15189が有効であるとされた。また今後多様性拡張性のある人材を育成するためにはまず多分野における力量の取得が必須であり、そのためには施設内における取り組みにとどまらず、国立医療ネットワーク間における人事交流も重要な手段となることが示唆された。

ま と め

今回のシンポジウムにおける議論を集約すれば、多様性に富む臨床検査部門で“個が輝く”臨床検査技師の資質とは、多様性を有し柔軟な対応力、さらには自由な発想を創出できる能力ということになる。またその対応力や発想力を生み出すためには、経験値を向上させ、幅の広い多分野における力量の

取得をまず行うことが必要である。またそのスキル向上を客観的に評価し、人材の有効活用に結び付けることも重要なポイントである。幅広い多分野における力量を有した人材こそ真の特殊特定分野における力量を有することが可能であり、そのような人材が人財となり将来生き残れる臨床検査技師ではないだろうか。

また多様性に富み変化に強い組織構築のためにはまずは各施設単位で育成プランを構築することが重要なポイントであり、それと同時に国立医療ネットワーク全体としての育成プラン実践も火急に必要である。全国共通の育成プランや人材の客観的評価を行うためには共通ツールが必要であり、ISO 15189は非常に有効なツールである。

現在臨床検査部門の喫緊課題として、組織改革、ブラッシュアップを繰り返すことが挙げられるが、そのためにはまず臨床検査技師長、ひいては組織全体としての意識改革が必要である。臨床検査部門に課せられた多くの課題をしっかりと見据え、対処方針を作成し確実に実践に結び付けることが肝要である。そのような実践を重ねることができれば、おのずと優秀な人材を確保することが可能となる。魅力のある組織には魅力のある人材が集まる。そうすれば「臨床検査はなくならないが、臨床検査技師はどうか？」といった議論にはならないと考えられる。

〈本論文は第72回国立病院総合医学会シンポジウム「多様性に富む臨床検査部門で“個が輝く”臨床検査技師の資質とは」で発表された内容を座長としてまとめたものである。〉

著者の利益相反：本論文発表内容に関連して申告なし